

社会的なものをいかに描くか

―ケアが発動する場所への関心

文・写真
森 明子

「社会的なもの」は、どのように把握できるのか。小稿では、社会的なもののあらわれを、ケアが発動している場所にみだし、描いていこうとする立場について述べてみたい。現在、私は、ふたつのプロジェクトをすすめている。「ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究」（科研費基盤研究（B）海外 JP15H05174）と、国立民族学博物館共同研究「家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究」である。これらのプロジェクトを展開するなかで、まとまりつつある考察の一部を提示し、この課題にとりくむ問題関心を述べたいと思う。

以下では、まず社会的なものについて述べ、次に、社会的なものへの関心からケアに注目することを述べる。第三に、ケアに注目することが何を可能にするのかを、ケアが発動する場所を切り口にして考える。最後に、このような記述が人類学研究としてどう位置づけられるのか、考えていきたい。



ベルリン、オラニエン通り（2006年）。

社会的なものをめぐって

現代世界に生きる人々は、何に共同性をみだし、どのようなつながりを社会に期待しているのか。これは、現代の人文社会科学が共有する問いである。グローバル化やネオリベリズムをめぐって行われているおびただしい議論は、この問いと共鳴関係にある。社会的なものを問い直す議論は、この問いへの取り組みの、ひとつのかたちであると私は考えている。こうした問いが起こる時代的背景は、およそ次のように理解できる。

近代の諸制度は、19世紀から20世紀初頭にかけて欧米でかたちをととのえた。20世紀半ばにかけて、それは世界中に播種されたが、世紀後半になると、このしくみの不具合が世界のあちこちで明らかになる（森2014）。グローバルな人口移動が、国家や国際社会のあり方を大きく変えたことはいまでもない。しかし、政治組織だけでなく、コミュニティや家族など社会生活の基礎をなすカテゴリーが、その編成を大きく変え、根本的な再検討を必要としている。ここにいたって、社会科学そのものが、近代国家建設と歩調をあわせてととのえられてきたことが想起される。私たちは、近代を批判的に相対化し、新しい社会像を明らかにするべき段階を迎えているのだ。

社会的なものをめぐる議論のテーブルには、社会学や哲学、近代史など隣接分野の研究者が集っている（斎藤ほか2010；市野川・宇城編2013など）。これらの議論を参照しながら、私は人類学の民族誌研究の立場から、社会的なものをとらえ、描き出したいと思っている。このことについて述べよう。

社会的なものは social、sozial（ソーシャル）を名詞として日本語訳したものである。ソーシャルという用語への私の関心は、ヨーロッパで私が出会ったいくつかの経験に根差している。別のところでも述べたことだが（森2008）、フランス語やドイツ語のソーシャルという語は、日本語の社会福祉にあたる意味を含む（市野川2006）。しかし、日本語の社会福祉という語が、専門的な職業や行政の職掌に対して使われるのに対して、ヨーロッパのソーシャルという語は、日常生活の対人関係においても使われる。たとえば、個人の行動についても「それはソーシャルだ／ソーシャルでない」という場合がある。これは、どういう表現なのだろう。私の経



ストリート祭を訪れた人々（2005年、ベルリン）。

験において、それは頻繁に使われるわけではないが、使われるときは、人の行動に対する話者の同意や期待、あるいは批判がこめられていた。問題にされているのは、その行動が内包する意味であり、当然のことながら、それは場の状況によって異なるものになる。このことから、ソーシャルという語は、人を動員する力をもつ語であると私には思えた。

フィールドでのこのような経験から、私は、人々が社会的と考えるものがどういうものであるのか、問うようになった。現段階で、私は、社会的なものは人を動員する（mobilize）力をもつと考えている。調査で私が経験し観察したことは、日常生活の文脈に埋めこまれているソーシャルという語を、明示的あるいは暗示的に経由しながら、他者との対話やケアの関係が編成されていくことであった。社会的なものを問う関心は、この関係が編成されるプロセスへの関心にほかならない。

ケアへの視線

ここで注目するのがケアである。近年、ケアはさまざまなメディアに取り上げられる見慣れたことばになった。医療や介護の現場で使われることが多いが、それ以外の場面で使われないわけではない。ただし、ケアという語をあらためて定義しようとする、それは容易でないことに気づく。定義しにくいのは、ケアが、心にかけている状態（配慮）と、世話をする行為（サービス）の両方を、同時に意味するためである。配慮することとサービスを提供することは別の行動であ

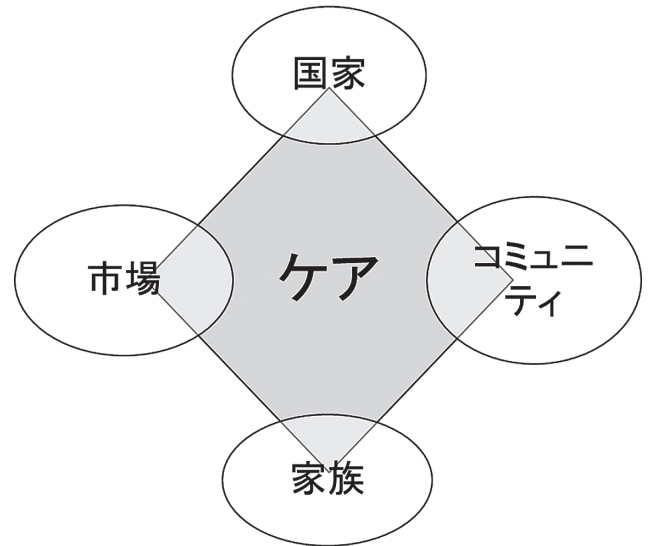
るが、それが不可分に行われることを意味するのがケアという語だ。

現在、ケアは人類学をはじめ、社会学、経済学、思想史や医療など、さまざまな学問領域において注目されている。人類学においては、Annemarie Mol や Tatjana Thelen の著作が刊行され (Mol et al. (eds.) 2010; Thelen 2014; 2015)、議論の精緻化がすすみつつある段階にあるといえよう。Mol や Thelen は、ケアを社会に埋めこまれたものとして、そのあり方を問題にしており、私の考えるケアの人類学も、これらの議論に連なるものである。

ここでは、ケアを「もつ者」(ケアの与え手) と「もたざる者」(ケアの受け手) のあいだで、サービスと配慮のやりとりをめぐって展開している現象と理解しておく。ケアをこのように理解すると、福祉は公的支援として行われるケアのひとつとして把握され、そこでなされる医療サービスや手当ては、やりとりされる複数の種類のサービスのひとつと位置づけられる。また、社会保険は、統計的に一定の確率で発生する災害を平等に負担するしくみであることから、ケア関係を匿名的に展開したかたちとして理解することも可能だ。今日の福祉政策は、一方で市場化、他方で家族への回帰傾向を示しているが、この過程もケアの実践の多元的な局面のいくつかとしてとらえられる。ケアは、福祉をその射程に含み、人類学の親族論と交換論に連続する。

ケアのありようを人類学研究として記述しようとする場合、まず考えられるのは、ケアに関わる多様なアクターを明らかにすることである。そして、どのアクターが何をしているか、アクター間にどのようなつながりがあるか解明する。

私は、ここでケアに関与するアクターに焦点をあてようと述べたが、落合恵美子らの研究は、ケア提供者のセクターに注目している。アクターとセクターの違いは、ケアから何を読み取ろうとするかに関わっている。落合らの研究は、当初、国連の開発プロジェクトとして行われた。各国のケアの担い手が、家族・親族、市場、コミュニティ、国家の4セクターのどれに該当するか注目した。そしてその比重をケア・ダイヤモンドと呼ぶ図に示すことで、南米、アフリカ、アジア、ヨーロッパの8か国の都市中間層を国際比較した(落



落合恵美子らのケア・ダイヤモンドの概念図。各セクターの比重の違いによってかたちが変わる(落合ほか2010により森作図)。

合ほか2010)。分析の指標とされたのはセクター間のバランスであり、関心は、サービス提供を誰が担うかという、福祉国家のあり方にある。

落合らのケアの国際比較は、エスピン=アンデルセンによる福祉レジーム概念を展開させたものである。エスピン=アンデルセンは、福祉が、国家、市場、家族のあいだで配分されることに注目し、その総合的なあり方を福祉レジームととらえた。そして、世界の主要な福祉国家が、アングロサクソン(自由主義レジーム)、北欧(社会民主主義レジーム)、ヨーロッパ大陸(保守主義レジーム)の3つの型に分類されることを論じた(エスピン=アンデルセン2001)。落合らが、福祉の国際比較という関心を、エスピン=アンデルセンと共有していることはよく理解できる。

翻って、人類学の民族誌研究についてみると、その関心は類型化して国際比較することにあるわけではない。私たちの関心は、サービスと配慮のやりとりが、どのような背景から何を契機にして行われているのか、そのやりとりから、どのような関係性があらわれてくるのか、ということにある。民族誌研究のアプローチは、このようなプロセスを描写するとき、まちがいなく強みを発揮する。

たとえば、私が調査しているベルリンの外国人が集住する地区についてみよう。移民の子どもの保育をめぐるには、家族と、行政の家族担当課のほかに、保育園両親の会、集合住宅住民組織、同郷者集団、宗教団体、社会福祉団体、移民行政、幼児教育指針、補助金政策などがアクターとしてさまざまに関わり、その関

わりが新たな関係性を生む。この過程でアクターはセクター間を横断するし、異種のセクターが協力したり競ったりする。その過程を民族誌研究として描こうとするのである。

場所を共有する人々

ケアを、アクターを基点として記述することは、何を可能にするのか、もう少し考えてみよう。そこに描き出されるのは、ケアの必要をみだし、調達し、提供し、受け取るプロセスであり、それに関わる複数のアクターのあいだの相互的な関係の編成である。さまざまなアクターを動員する関係の連鎖が、ケアによって立ち上がってくる局面がここにあらわれる。

ケアを要請するのは、サービスの欠乏である。その充足のために、その時その場にいる者が、突き動かされる。ケアの発動である。その場にいる人は、たまたま居合わせた人かもしれない。この人々のあいだに、ある種の共同性が生まれるのだが、この共同性は、属性や、資源への排他的なアクセス権や排他的領有によって選別された人たちがつくる共同性とは、明らかに異なる。正規のメンバーシップを与えられないままに、たまたまそこに居合わせることになった移民や難民、病人や障害者も、ここではアクターとなる。それは、場所を共有する人々のあいだにつくられる関係である。

たとえば、現代世界の大都市の集合住宅には、互いに知らぬ者が、たまたま隣り合って生活している。出身地や職業、家族構成や年齢、社会的背景は、まったく多様である。このような集合住宅の住人のあいだに、ケアと呼ぶにふさわしい配慮とサービスのやりとり関係が発動することがある。ふたたび、私の調査したベルリンの例を述べよう。



集合住宅内部の各戸は扉で隔てられるが、階段と煙突でつながる（2003年、ベルリン）。

重い荷物をもって困っている人を目にしたら助けることは、ベルリンではしばしばみられる。隣人のあいだでは、もう少し細やかな配慮も行われる。たとえば、冷えこむ日に「〇〇さんは暖かく過ごしているだろうか」という気遣いは、隣りあう人のあいだにこそ起こる。以下に述べるのは、そうした気遣いから配慮とサービスをやりとりする関係がつくられていった例である。

その集合住宅では、2000年代初頭に、家主が、セントラルヒーティングの設備を導入し、石炭の古くて貧しいイメージからの脱却をはかった。暖炉で石炭を燃やす暖房は、時間と手間がかかり、部屋も汚れる。各戸は、大量の石炭を調達し、管理し、灰の処理をしなければならぬし、家主は煙突の維持管理をする義務がある。セントラルヒーティングが、こうした手間や労力を一掃してくれるはずだった。だが、家主の意向に反して、住人たちは安価な石炭を使い続けた。

このころ、階上に住むひとりの老人が亡くなり、高齢の未亡人と障害をもつ息子が残された。まもなく、ふたりの隣人が、老婦人の石炭購入への手助けを申し出た。石炭は、トン単位で買うのが安いですが、それほどの収納スペースはないので、2軒が協力して共同購入することがある。それまで共同購入してきた2軒が、老婦人を誘って3軒で共同購入することにしたのである。3軒目に入れてもらえば、老婦人は、石炭を安価に入手できるだけでなく、石炭の残量を心配して寒さをこらえることや、何度も石炭を階上まで運ぶ労力からも解放される。ただし、共同購入のためには、それぞれが



左が石炭1個で、一度に7～10個を暖炉にくべる。右のように束ねて売られる。1束は44個、40束で1トンになる。

石炭を使いきる時期、配達日、配分の内訳などについて取り決める必要があるし、配達日には待機して、住宅の汚れ除けをし、石炭置き場で石炭の積み方を配達員に指示するなど、迅速に対応することが必要である。老婦人を共同購入の仲間に入れることは、その全般にわたる配慮をすることを意味した。最終的にこの3軒は、一冬に3トンの石炭を共同購入した。

さらに、隣人の1人は、老婦人の障害をもつ息子のために活動グループを紹介した。息子はその会を毎回楽しみに参加するようになり、そこで今度は息子が、隣人のゴミ出しを助力することを申し出た。集合住宅では、家庭ゴミを分別して裏庭に出すことになっている。隣人は、家庭ゴミや石炭の灰がポリバケツにたまると、扉の前に出しておく。通りがかりにバケツを目にした息子は、それを裏庭に運び、空のバケツを戻しておく。これが日常的に行われるようになった。

こうして行われる配慮やサービスが、永続的に続くと考えられているわけではない。しかし、受け手の側では、やってくれるはずだ、とあてにしているし、与え手の側でも、あてにされることを期待している。行われなければ、どこか調子が悪いのではないか心配し、別のサービスが必要になったときには、臨機応変に対応しようとする。ここには、配慮とサービスの新しい関係性が生まれている。重要なことは、サービスの与え手にとっても、受け手にとっても、それがその時その場で、必要だとみなされていることである。いまは必要ないが備えておこうとか、必要ないがタダならやってもらおう、という場合は問題にされない。この



集合住宅の連続がストリートをつくる（2003年、ベルリン）。

点で、与え手と受け手は一致している。

やりとりが、空間的にどこで行われているかということにも、注意しておきたい。集合住宅でのやりとりは、各戸の扉をあけた状態で行われるか、あるいは扉の外でなされる。扉の内部にまではいることは、通常はない。当事者たちが、緊急と判断した場合は別である。

関係が構成されるために、属性がほとんど問題にならないことも注意される。3軒は、出身地も、職業も、年齢も、世帯のサイズもその構成も異なる。隣人の1軒は、60歳代の女性の独居世帯で、部屋数も少ない。もう1軒は、50歳代の女性が、子供が家を出たあとに、学生の同居人をおいて生活している。ふたりの女性とも、パートナーの男性がいるが、住まいを別にし、結婚していない。3軒目の未亡人は70歳代で、障害をもつ息子との生活である。

3つの世帯は、理念的な家族とされるものからは逸脱しているが、現代、このような逸脱はそれほどめづらしいことではない。同居人を含むそれぞれの世帯の構成員は変わりやすく、世帯外に助力を求めることもあるが、助力の内容はそれぞれ異なり、サービスの与え手は、子供であったり、友人や親族であったり、行政であったり、隣人であったりする。それぞれの世帯が親族や友人ともつ関係と、3軒のあいだにつくられる関係は、同じではない。しかし、行政との関係も含めて、これらの関係は部分的に重層し、ときに連結し、場合によって大きなネットワークを発動させることもある。たとえば、老婦人が体調を崩して入院したときは行政が対応したが、隣人やその友人にも情報は伝えられた。必要とあれば、その人々は助力を申し出ていたと思われる。それが大きなネットワークの発動になっていた可能性はある。

この3軒の隣人は、互いの関係をとくべつのものだと意識しているわけではないが、大切にしていることはまちがいない。私は、この3軒のあいだにあらわれたような関係を、場所を共有する人々の関係として考察していきたいと考える。

隣接的關係、場所、社会的なもののあらわれ

大都市の集合住宅は、各戸が孤立していると言われることがある。扉を閉じた各戸は、互いに関心がな

いようにもみえる。だが、建造物としての集合住宅の各戸は、階段と煙突でつながっている。階段は各戸の扉を、煙突は各戸の暖炉を連結する。前節で述べたケアの例は、建物の構造上のつながりが、人々の日常生活にも投影していることを示している。

暖炉で燃やす石炭の使用は、清潔やスピードとは正反対の、汚れと手間と時間を要するが、住人たちはそれを遠ざけようとするどころか、石炭の調達や灰の処理に協力関係をつくりだしている。これは、セントラルヒーティングを導入して、不動産としての家の魅力を高めようとした家主の意に反することであった。

ベルリンの事例として述べてきた配慮とサービスの関係は、他の都市の集合住宅でも起こりうることだ。集合住宅のなかには、住人同士が親しく訪問しあう例もあるし、そうでない例もある。しかし、訪問しないことは、かならずしも関係が希薄であることを意味しない。隣りあって生活している人々は、対面して会話をしない場合でも、生活音を聞いたり、後ろ姿をみたりして、相手の存在を感じ取り、必要としているものを見てとったり、認めたりする。

このような配慮とサービスのやりとりの連続をケアとしてとらえて、そこにあらわれる関係性を描くことを、現段階で私は考えている。ここから、どのような議論を展開していこうとするのか、その見通しを、かんたんに述べて結びとしよう。

第一は、隣接的な人間関係についてである。隣接的な人間関係への視線に注目する近年の議論は、全体をとらえる統合ではなく、隣接しあう者たちの相互性を基盤にした関係こそ重要だと主張する（土屋 2002; 小田 2010）。集合住宅の人間関係としてここでみてきたものもこれであり、この隣接的な人間関係は、ケアの実践と共鳴しあう。

もうひとつは、場所をめぐる議論である。場所を民族誌記述のなかでとらえなおそうとする議論は、ポストモダンシティやグローバル・シティなどの議論を批判的に展開するなかから起こってきた（Gupta and Ferguson 1997a; 1997b; Smith 2002）。場所を単一のものとしてではなく、多元的で競合するアイデンティティをもつものとして理解する議論である。たとえば、集合住宅の人間関係を取りあげよう。集合住宅の住人は、さまざ

まな出自をもっていて、首尾一貫したコミュニティのナラティブからは零れ落ちてしまう。彼らは、ここ以外の別の場所へのアイデンティティをもっていて、それぞれのネットワークによって、ときに国境も超えるコミュニケーションと接合している。そのため集合住宅の住人の出会いは、その時その場に居合わせている人同士の関係をつくると同時に、それよりはるかに大きな規模でひろがる関係へのつながりもつくる。

私は、当面、この隣接的な関係への視線と、多元的な場所への視線を合わせた文脈に、配慮とサービスのやりとりをめぐる展開する、ケアの実践を描き出し、いこうと思う。そこに社会的なもののあらわれを期待している。

【参考文献】

- 市野川容孝 2006『社会』（思考のフロンティア）東京：岩波書店。
市野川容孝・宇城輝人編 2013『社会的なもののために』京都：ナカニシヤ出版。
エスピン＝アンデルセン 2001『福祉資本主義の三つの世界—比較福祉国家の理論と動態』京都：ミネルヴァ書房。
小田 亮 2010「序論 グローカリゼーションと共同性」小田 亮編『グローカリゼーションと共同性』東京：成城大学民俗学研究所。
落合恵美子ほか 2010「特集：ケア労働の国際比較—新しい福祉国家論からのアプローチ」『海外社会保障研究』170号。
斎藤純一ほか 2010「特集＜社会的なもの＞の概念再考」『社会思想史研究』34: 6-84。
土屋恵一郎 2002『正義論／自由論—寛容の時代へ』東京：岩波書店。
森 明子 2008「ソーシャルなるものとは何か」『民博通信』121: 1-5。
森 明子編 2014『ヨーロッパ人類学の視座—ソーシャルなるものを問い直す』京都：世界思想社。
Gupta, A. and J. Ferguson (eds.) 1997a *Culture, Power, Place: Explorations in Critical Anthropology*. Durham and London: Duke University Press.
— 1997b *Anthropological Locations: Boundaries and Grounds of a Field Science*. Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press.
Mol, A., et al. (eds.) 2010 *Care in Practice: On Tinkering in Clinics, Homes and Farms*. Bielefeld: Transcript.
Smith, M. P. 2002 *Power in Place: Rethorizing the Local and the Global*. In J. Eade and C. Mele (eds.) *Understanding the City: Contemporary and Future Perspectives*, pp. 109-130. Oxford: Blackwell.
Thelen, T. 2014 *Care/Sorge: Konstruktion, Reproduktion und Auflösung bedeutsamer Bindungen*. Transcript Verlag.
— 2015 *Care as Social Organization: Creating, Maintaining and Dissolving Significant Relations*. *Anthropological Theory* 15 (4): 497-515.

もり あきこ

国立民族学博物館グローバル現象研究部教授。文化人類学。ヨーロッパの民族誌研究、人類学研究を課題としてきた。おもな著作に『ヨーロッパ人類学の視座—ソーシャルなるものを問い直す』（世界思想社 2014年）、『土地を読みかえる家族—オーストリア・ケルンテンの歴史民族誌』（新曜社 1999年）、『歴史叙述の現在—歴史学と人類学の対話』（人文書院 2002年）など。